

日中間に隔てなし

——文学は国境を越えて

作家・評論家・日本文芸家協会会員 稲垣真美



善 隣

「日中間に隔てなし」と私は実感によって言うのです。

戦前の小学校5年のころ、私の育った京都の洛北の家に、京都大学医学部の王和成という中国の青年が時々訪れて来ました。上海市政府の局長の子で、旧制一高の特設高等科の理科に留学して京大に進学したのですが、今でも覚えていますのは、一高の寮生活でいい友達が出来たと話したこと、もう一つは、その後盧溝橋事件が起こってから、彼が母方の実家のある北京に帰省して戻って来た時、中学生の私に、戦禍で同胞が殺戮されているのを見てたまらなかつたと言いで

「君は戦争をどう思う？ぼくはもう戦争のニュース映画や新聞記事も見たくないね」と問いかけたことです。それで私の戦争観が変わりました。

王さんは京都の女性と結婚して中国に帰り、医師となって、戦後、北京の病院長を務めました。1966年に文化大革命によって拘禁され、山西省の監獄で病気になる、必要な薬も与えられぬまま69年12月獄死しました。後に名誉回復はされましたが、その後半生知るにつけ、一層慕わしく思うのです。

もう時効ですが、戦中やはり一高の特高科から京大に籍を置いた中国留學生を、家に暫くかくまったことがあります。彼は九光会という「愛国抗日」の留學生グループのメンバーで、まもなく故国に脱

出しましたが、私の母のことを仲間と「お母さん」と呼んでいました。

戦後、一高の寮で黄彩延君という中国留學生（のち青森の病院長）と同室になりました。食糧難の最中でしたが、日曜の前日、「ぼくは友達のところへ遊びに行くから、これ全部食べていいよ」と2升も入った取って置ききの米袋を私の足元に置きました。

中国の人といえば、こんな記憶しか私にはありません。さらに1983年、私は空海の遣唐僧時代の事蹟を調べる必要があつて、中国へ行きました。北京で作家協会の歓迎を受け、西安、洛陽、五台山、紹興、上海、杭州、寧波などを周りましたが、その途中、上海に着いたとき、それまでの案内人と異なった感じの旅行



尾崎秀実

社の女性が、ふとこう言ったのです。「上海には自由があります。北京とは違います」

そのころの上海はまだビルといえは古い租界のもので、郊外に建ちかかったホテルや、自由市を許された農家の新築が目につく程度でした。

ところが20数年後上海を再訪した私は、人口1900万に達したそこに、ニューヨークのブロードウェイ、マンハッタン、元の貿易センタービルあたりまでをそのまま摩天楼ごと10あまり移したほどの変貌ぶりに驚くことになりました。同時に、上海には自由がある、と言った嘗ての人の言葉も蘇りました。

上海に知り合^シいもできて、長江（揚子江）の河口に崇明島^{シヨウメイ}という佐渡島ほどの中州の島があり、自然がとり残されたように生きているのを知りました。そこに



郭沫若

元知事の家族が文化大革命で不幸な目に遭い、今も立ち直れないでいるのに出会い、及ばずながら支援することになり、その家族は私を「お父さん」と呼んでくれています。

昨年ノーベル文学賞を受けた中国の作家・莫言^{モイー}の作品を多く訳した中国文学者の吉田富夫氏は、古くからの友人ですが、莫言との隔てない交遊を通じて「中国と日本は親戚みたいなもの。時にけんかしても、いざとなれば親身につきあえる」と言いましたが、私はもっと肉親に近いふれあいを信じております。

二

しかし、日本人一般の多くは、なお戦前並みの中国乃至中国人観から抜けきれないように見受けられるのは、残念

なことです。戦後世代の家族間ですら、中国や中国人に関して、何らかの偏見なしに会話を運ぶことは少ないのではないのでしょうか。

戦前はその傾向が甚しく、軍部の戦略に拍車をかけました。それが、戦後60年以上経っても大して変わらないのなら、まことに奇妙なことです。中国及び中国人の側でも同様だとしたら、それは互いに知らなすぎる、無理解が障碍となっているにちがいありません。

その相互の無知と無理解を除こうとしたので想起されるのは、尾崎秀実氏（1901〜44）のことです。尾崎は台北育ちで、1925年に東京大学法学部を出て朝日新聞社に入り、28年に上海支局に赴任します。そこで彼は通常の特派員や記者のレベルを越えて、中国と中国人への理解を深めようとします。

赴任に当って、一高以来の先輩・羽仁五郎から、彼のハイデルベルク留学中、下宿で一緒だった大内兵衛、有坂広己両氏（ともに戦中に思想弾圧の迫害を受け戦後東大経済学部教授に復活）が、日常如何に深くドイツの国情を知ろうとしたか^カの見聞を例に、中国の表相だけでなく、真底にあるものを把握せよとアドバイスされる。そこで尾崎は、中国の経済や諸



戦前の上海



魯迅

外国との貿易実績の精密な統計を入手する一方、民衆や解放運動を内側に入りこんで知ろうと努めます。同時に、かの魯迅に会い、敦洙若の率いる文学サークル・創造社に拠る田漢、郁達夫、陶昌孫らの進歩的文学者たちともつき合う。中国共産党の秘密組織の活動家とも接触しながら、東亜同文書院で日本の行方を憂える祖国の学生たちを支援して、読書会を組織することも手伝います。そのような日常と歳月を重ねながら、尾崎は、貧困にあえぐ中国の民衆の息吹にふれ、その底に革命や改革への燃え上がる意思の胎動を体感したのです（『女一人大地を行く』（白川二郎のペンネームで尾崎秀実が訳出）のアグネス・スモデレーヤ、ゾルゲからの接近などは副次的なことにすぎません）。こうして尾崎は、内から変容する中国を上海において会得しながら、19



近衛文麿

32年、帰国しました。帰って来てからも、尾崎は35年当時の中国への英・独・日・米の経済進出の動向を数字での確にとらえた論文や、中国ソビエト（解放区）の建設に長征する人民解放（共産党）軍と、それに手こずる国府軍の趨勢を、公刊の雑誌に報告しています。

1936年12月には、張学良が西安に「蒋介石総統を監禁する「西安事件」」が起きました。このとき張は蔣を暗殺などせず、国共合作を画するという予測をピタリと言い当てたのは、並みいる中国問題評論家の中で尾崎秀実だけでした。

その翌年の37年6月から第一次近衛文麿首班の内閣が発足し、7月に盧溝橋事件を起こす。以後泥沼化して拾収つかぬまま大東亜戦争にまで到り、45年8月敗戦によってようやく終わる最悪のシナリ

オの始まりでした。

この間尾崎は近衛に近い昭和研究会のメンバーに加えられ、38年7月からは近衛内閣の囑託にもなっています。しかし、近衛は39年ごろからしきりに日中和平を唱えながら、蒋介石の国府を相手にせずと称して、汪精衛の傀儡政権と結ぶという愚策に甘んじ、決定的に局面を悪くしました。中国民衆を結集するものは何かを知る尾崎がそのような策を考えるはずはありません。

すなわち近衛は、中国を真底から知ろうとした尾崎をブレンとしながら活用することをせず、空しくスパイの汚名を被る立場にのみ追いこんだことになりました。挙句にすべてを軍部に丸投げして、日本を敗戦の淵に沈めました。

三

そこで、戦後ということになりますが、日本と中国では大きな違いがあります。日本は敗戦国ながら、間もなく朝鮮戦争で思わぬ特需を得て、そこから繁栄が始まり、その延長上に何となく現在がある状態です。ところが中国は勝つには勝ったが、それからが大変でした。

国共の内戦を制した共産党によって中

華人民共和国が樹立され、毛沢東の施策下、土地改革、農村の人民公社化の激動があり、1950年代末には大躍進政策が唱えられましたが、その半面、農村が疲弊して数千万人の餓死が出る事態も起ります。

それに対する経済政策はとられたものの、66年から文化大革命が始まり、中国全土に紅衛兵が跋扈して、手当たり次第に有産階級や知識人の家を襲い、有形・無形の文化の破壊活動が行われます。造反有理の言葉は日本の学生運動にも伝えられました。中国でのそれによる死者は何十万とも何百万とも伝えられます。これに続く都会の若者たちの強制的な農・漁村への下放がやっと終るのは、70年代に入ってからでした。

現在の中国は、心ある人々が「悪しき資本主義」と憤るのをよそに、アメリカ



莫言

をしのごく経済大国の様相ですが、ここまて来るのにはすさまじい変転があり、中高年の人々はそれを生き延び、1980年代以後に生まれた若い層は、両親は不幸な時代をくぐり抜けた、と自覚しています。こういうちがいが日本及び日本人との間にあることを、理解してかからねば、相手に親身にはなれません。

話を主題の文学に移すならば、中国の現代の文学者たちは、みなこの激動を生きて体験し、生き抜くことによって書き、苦闘し、苦悩し、抑圧され、はね返し、また書くの繰り返しです。もう書けない、という詩人までいます。特高（特別高等警察）その他による弾圧のあった戦前の日本ならいざ知らず、現在の日本の文学状況とは全く異なります。

典型的な二人の中国の作家とその作品をご紹介します。一人は莫言、昨年ノーベル文学賞を受けました。次の一人は余華、『活きる』という長編が代表作で、映画化もされカンヌ映画祭で審査員特別賞になりました。

まず、莫言は、1955年山東省の青島と済南をつなぐ鉄道沿線にある高密県東北郷の農家に生まれ、今もそこに住んでいます。幼児期、飢餓状態が農村を襲ったとき、石炭を発見して食べた経験もし

ています。小学5年のとき文化大革命に遭い、中農の子だということで教室から引きずり出され、学校の塀の外で牛番をさせられる。江青ら4人組の失脚後、大学進学の可能性は開けるが、貧農の子が優先で、中農生れの莫言はそれもダメ。実兄は上海華東師範大学を出ているのに、です。

何とかして前途を開きようと、莫言は軍隊に入ることになりました。年齢超過でしたが1歳若く偽り、親戚のコネで村の書記の許可をとりつけ、やっと解放軍に入隊を果たします。物語りの才能に恵まれていた莫言は、やがて宣伝の任務につき、軍の機関誌に小説めいたものを書くようになりまます。しかし、それは軍隊用語や教条に制約されたものでした。

たまたまある日、彼は日本の川端康成の『雪国』を読みます。そして次の行文に出会ってハッと驚くのです。啓示を受けるのです。

『黒く遅い秋田犬がその踏石に乗って長いこと湯を舐めていた』『雪国』
「そうか、小説は犬が出てきてもいいのだ。そして温い湯も——」。気がついた莫言は『白い犬とブランコ』(1985)

という小説を書きました。その書出しは「高密県東北郷原産のおとなしい白犬は

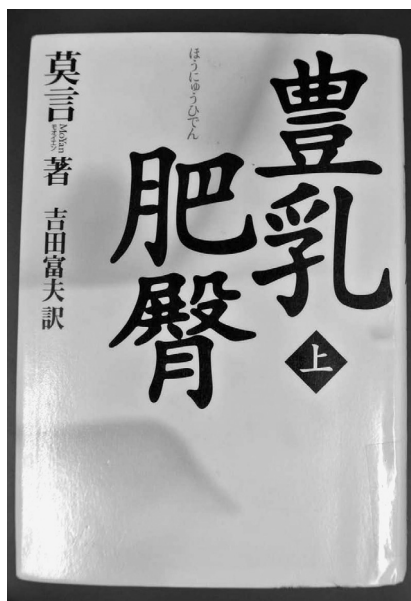
——」。物語りの中身は、1980年代に町で教師になっていいるボクが、10年ぶりに故郷の村に帰る途中、高粱を背負った女性に出会う。彼女は昔の恋人で、片目です。2人でブランコに乗って遊んでいたとき事故のため片輪になりました。そのため口のきけない男としか結婚できず、3つ児が生まれましたが、みな口がきけない。彼女はそんな告白をしてボクに言います。

「物の言える子どもがほしいわ。よし、と言ってくれたら私は生きていく。ダメと言ったら死んでしまふ。ネ、どうなの？ 言いわけは聞きたくない」

片目しか見えないまま農村にとり残された女性、物も言えない子どもたちしか産めない運命、そこから必死で脱け出そうとする姿——ある寓意を莫言はこめていたようにも思えます。

以後、莫言は立てつづけに『透明な赤蕪』『赤い高粱』など、いずれも故郷の農村を舞台の秀作を書きます。映画化もされ、外国の賞も受けました。そして1995年、8万字に及ぶ大作『豊乳肥臀』を完成します。

『豊乳肥臀』の主人公ともいえるのは、上官魯氏という農家の母親です。この母



『豊乳肥臀』

はゴリキーの『母』をしのぐすさまじい一生を送ります。小説は前の大戦中に村が日本軍の進攻に遭うところから始まります。上官魯氏は何とか男の子を産もうとして次々7人の子を産みますが、みな女の子でした。その名前も「来弟」とか「招男」とか「想弟」とか、次には男の子を、との願いがこめられていました。しかも魯氏の夫は精子に恵まれず、子どもたちの男親はみな違うのです。そしてこの女の子たちは成長すると、抗日大隊司令の第3夫人になったり、共産党軍のリーダーと結婚したり、皇軍協力軍司令の妻になるものもいて、旦那同士はすさまじい戦闘をくり返します。5女はアメリカ空軍の軍人の妻となり、4女は遊女屋に自ら身売りする。



余華

まことに戦中、戦後の中国を反映して娘たちの生きざまは多様多彩ですが、子どもができるとみんな母親の魯氏に預けにきます。そこへ農村飢餓の時代、魯氏はその孫たちを飢えさせまいと、豆を飲みこんで来て吐いては洗って食べさせます。このため魯氏は内臓を病み、痩せ衰えつつ最後の恋を異人の牧師と生命がけでします。双児が生まれ、その一人は念願の男の子でした。

物語はまだまだ続きますが、**莫言**はノーベル文学賞の受賞講演の冒頭で、てん足に前時代の名残りをとどめながら、どんな困難な事態にも子どもをかばい続けてくれた亡母を偲んだそうです。そういう母の面影を、主人公に託し、彼女とその肉親がそれぞれに戦中、戦後の中国の農村での歴史的に地上を体現する構成が、作品に無限の深まりを与えています。

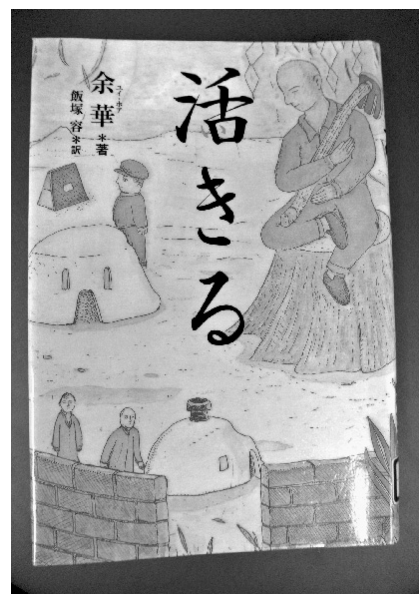
次に『活きる』の余華は1960年杭州の生まれで、両親はともに医者、自分自身も一たん歯科医になりましたが、やめて1983年に海塩県や浙江省嘉興市などで文化関係の職を得て、創作を始めました。1990年から翌年にかけて北京師範大学と魯迅文学院が共催した創作研究班に学んで、莫言とも交流したそうです。以後北京に定住して長編『雨に呼ぶ声』

を書き上げます。それより前には文化大革命時に失踪して発狂した男を描いた『一九八六年』（87年）、幻想小説的な『世事は煙の如し』（88年）などを発表していました。

代表作となった『活きる』は初め92年に中編として上海の文芸誌『收穫』に発表。その後映画化が決まって長編化され、92年に長江文芸出版社から刊行されました。

民間の歌謡収集の旅に出た若者が、とある農村で老牛を相手に一人田を耕す老人の歌に出会い、悲痛極まる、それでいて泣き笑いの生涯の話を聞く、という設定です。

福貴と名乗る老農夫は金持の地主の息子でしたが、イカサマばくちにやられて



『活きる』

土地を失う。しかし戦後土地を奪った男はかえって地主ゆえに告発され銃殺される。福貴は助かったもののボンボンで乱世について行けず、世をすねた農夫として辛くも生計を営むほかない。歯医者娘だった妻にも、息子にも先立たれる。最後に望みを託した亡き娘の生んだ孫や婿にも死なれて、天涯孤独に細々と農耕をつづけるほかなくなった福貴は、相棒にするべく、牛を市に買いに行きます。

そこでは買手のつかない役立たずの牛は屠殺場に送られます。老牛が一头その運命を予知して、地面に水溜りができるほど涙をポタポタ落としていました。福貴は、笑われながらその牛を買ってきて余生をとものにすることにしたのでした。余華はもともと知識階級の家庭の出身

ですが、莫言と同じように中国の現代までの国情と世情を体感しながら、それを一人の人間に襲いかかり、奔ろうする変転としてとらえ、そこはかかない哀歎をこめて『活きる』に表現しています。それがわれわれの市民感覚をも動かすように思えます。

四

戦前の1930年代の中国で、ロマン・ロランの『ジャン・クリストフ』を全訳した傳雷という文学者がいました。1908年江蘇省の裕福な地主の家に生まれ、フランスに留学してロマン・ロランの『ペートーヴェンの生涯』に感激して、西洋美術や音楽への造詣も深めた人です。戦後、息子の傳聡がポーランドに留学して、アシュケナージなどとピアノ・コ



芒克

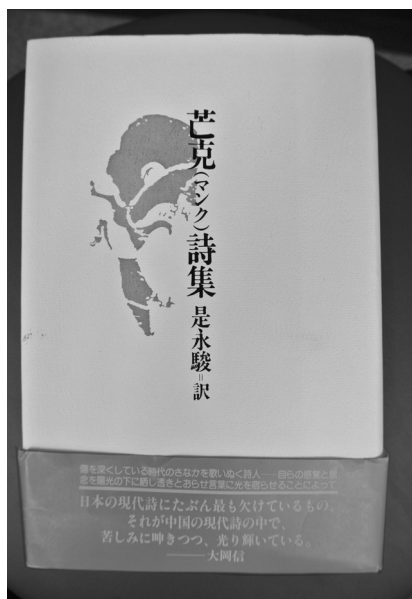
ンクルの首位を競い、有名なヴァイオリニスト、メニューインの娘と結婚しました。その留学中の息子に宛てた手紙の中で傳雷はこんなことを言っています。

〔君は〕シヨパンのエチュードまたはスケルツオの速いパッセージを練習するのに、いつも速度が足りないとかぼしていませんね。しかし速度が十分になったら、君の音楽表現は今追い求めて

ているものとはきつと違ってくる。もしこの憶測に間違いなければ量的変化が質的变化をもたらすという道理に説明がつくでしょう〕

「中国は古代以来物に執着せず、物に支配されないことを最も重要な人生哲学としてきました。私たちの中に守銭奴がいなわけではありませんが、モリエールやバルザックの描いた守銭奴や野心家に比べたら見劣りしてしまっています。中華民族の大多数の者は性格が穏やかで淡泊、素朴で、西洋人よりも容易に満足することができます」
(榎本泰子訳)

しかし、音楽をマルキシズムでとらえようと、中国の伝統思想の持主でもあった傳雷は、文化大革命が始まるや、迫害



『芒克詩集』

にさらされ夫人の朱馥梅とともに1966年11月自殺を余儀なくされました。すぐれた現代詩人の一人として芒克とその作品も紹介しておきましょう。

芒克は1950年遼寧省の瀋陽に生まれます。北京の高校を卒業後、下放で河北省白洋淀の農村に過ごし、その生活に根ざした詩を1970年代から書き始め『思』にまとめました。「元氣かい、猟師の足弟」の呼びかけに始まる、素朴で温もりのある「漁師の兄弟たちへ」など初期の詩が入っています。

76年に芒克は北京に帰り、工場で労働しながら78年末、詩の仲間たちと雑誌『今天』を創刊して、詩や評論に新しい朝を開こうとする運動を展開しようとしてきました。しかし旧時代の公認作家・評論

家たちは、地下文壇視された『今天』の新しい詩を「朦朧詩」と呼んで受けつけず、『今天』の雑誌そのものも官憲によって不法出版物とされ、編集責任者は投獄されることになりました。『今天』の詩歌は中国20数省の大学、高校生、若者たちに熱烈に迎えられていたのに、です。

芒克は工場を解雇され、『今天』も廃刊となりましたが、以後職につかず『旧き夢』(81年)、『陽光の中の向日葵』(83年)、長詩『群猿』、組詩『時間のない時間』(87年)等の詩集を出して文学活動を続けました。

その中の一篇「鼠害」(86年)から、芒克が高校生時代に身につまされ直に体験した、文化大革命の現実を顕在させたとと思われる詩句をここに引いて置きましょう。

* やつらは獐犛どうしゅう

子供の耳に食いつき、女の股を噛じる

やつらは狂ったように男の頭をコッ

コッ叩く
カップルの蒲団をいやしげにめくる
物と見ればたたきこわし、鍵と見れば

こじあける
それによつらは糞尿を気持ちよさそ

うに

老人の口に流しこむ

やつらは丸裸の若い女を跪かせ
皮のベルトでかわるがわる堪能する

まで鞭打つ

やつらは若者をとりかこんで

棍棒で面のあばらをこれでもかと思

き上げる

やつらはばあさんの胸をなぐり

じいさんの股間を蹴り上げる

やつらは娘っ子の髪の毛を

よってたかって ひっつかみ 丸坊

主にする

やつらは目にとまるものは 何でも

かっさらい

おいしいものと見れば貪り食う

やつらは他人の家を

娯楽場や拷問部屋にする

(「鼠害」より、是永駿訳)

*

『今天』の執筆者の多くは作家協会に吸収されましたが、芒克は行きませんでした。いま絵を書いているそうです。

私は日本ペンクラブの国際委員を務めました。こういふ中国の文学状況について精しく話されたことはなかったと思います。国境を越えた活動が建前のはずのペンクラブにして、その仕末です。ま

して、ふつうの日本のだれ彼が、どれほど中国の現代の歴史的状況や、それを真摯に体现している文学について知っているでしょうか。まず知らねばなりません。

莫言のよき翻訳者である吉田富夫氏(佛教大学名誉教授)は、莫言を日本に自費で招んで、広島県の故郷の農家である実家に案内した時、農民の莫言と本当に心の隔だてもなくなり、囲炉裡端で一晩中語り合かし、雑古寝したと言います。日中間では雑古寝の間柄すらも出来ないことではないのです。

「日中間に隔てなし」はかくして夢・幻には終わらないのです。

(10月4日・講演会)

講師略歴(いながき まさみ)

1926年 東京都生まれ

1955年 東京大学大学院美学専攻

終了

1965年 『苦を紡ぐ女』で作家に。

その後、文学のかたわら

日本酒の研究にもうちこ

み「全国酒類コンクール」

を主宰

著書『旧制一高の文学』『ほんものの

日本酒選び』など多数。